

「名古屋中学生転落死検証委員会報告書」に思う

- 死をくいとめることはできないか -

丹下加代子 子育て親育ちの会(仮称)

★ なぜ死なねばならなかったのか

2013年7月10日名古屋市の中学生(A)が自死し、2014年3月27日に検証委員会による検証報告書が提出された。

今回の事件は私にとって衝撃的だった。何年か前から該当校の父母から学校側の指導について相談を受けていたからである。「死ね」が日常的に飛び交っている中で子どもたちはそれぞれのキャラをたてて、生活をしていた。教師集団は指導が行き渡るようにいったん決められた規則は一枚岩のように徹底しようとしていた。中には子どもたちと戯れている教師がいて、「今はもっと・・・の指導をすべきだ・・・」と足並みを崩す教師として教師仲間から批判されているようであった。「・・・と・・・先生が言ってたよ」と、強権の教師を前面に出すと、ほかの教師は何も言わず、それがあたかも前から決められていた規則のようになっていった。

強い指導がまかり通っていた中で起きた事件であった。

私は「やはり」と思うと同時に「なぜ防ぐことができなかったか」という思いをもった。

★ 調査報告書の限界

いじめの検証報告書を読んだが、このような事件を二度と再び・・・といった確かな手応えをもつことはできなかった。

以下の報告文を例に挙げる。

第4章 要因の背景事情と問題点

第1 学校の状況

1 生徒理解と生徒指導

(2) 生徒指導連携

「教職員全体が何を大切に指導していくかが明確でなかったことが効を減じている。

それには、学校生活で起こる様々な問題について、その行為の意味や、それがもたらす結果や責任等をしっかり理解させる毅然とした指導を、温かく粘り強く続けていくことが必要である。」

第6章 提言

第1 学校の使命と教師の覚悟

(検証報告書)

このような言われ方はこれまでこの学校だけではなく、日本中の学校が文科省から教育委員会から指導されている文言である。

該当校の父母の言葉では「毅然」とした指導がなされていたし、先生たちは覚悟もあったし、連携もあった。授業中、教室を飛び出す生徒に授業をもっていない教師が指導に当たってくれていた。部活も実際には山のような仕事に追われてか十分にはみてもらえていなかった。夜遅くまで学校は電気がついていて、

「どの教師も力の限り頑張っている」とまとめておいて、一方で、「覚悟」を要求し、精神論を振り上げられても新しい道は見いだせない。

★ 指導の限界

第4章 要因の背景事情と問題点

第2 「うざい」「きもい」「死ね」の日常化

(検証報告書)

以上についても言葉の問題として述べ、なぜそういった言葉が止められないか、どうすればいいのかが見えてこない。

「人は愛されて、初めて人を愛おしく大事に思えるようになるのである。その真実を子どもたちが実感できる豊かな取り組みがなされることが必要である」とまとめられてしまうと、各学校はますます一定の価値観を教え込む道徳強化の道に走るであろう。そうして少しも解決をされずに不幸な事件はまた繰り返されるであろう。

言葉の問題として挙げていくのなら、今後、Aのように「言葉を文字通りに受け止めやすい」子どもたちが受ける言葉の暴力をより深刻に考えるべきである。

Aは「うざい」「きもい」「死ね」「お前、自殺しろ」と日常的に言われていた。「視界から消え

ろ」と言われて相手の視界に入らない場に移動していることから「お前、自殺しろ」という言葉は重たい。

1年担任は、AにとってBは「仲が良い時とそうでない時の波がありはしたが、何かあっても、後に引かない多少の言い合い程度」との見方をしていた。

2年担任は「『ちょっかい』であり、『いじめ』ではないと認識」ほとんどの教師は、Aが受けていた言動を知らず、一部見聞きした教師も「ちょっかい」「ふざけ合い」程度に見ていた。

(検証報告書)

「気づけなかったこと」に指導の限界を感じた。該当校の教師も子どもたちも日々の生活で苦悩していた。そのため「気づけなかったこと」を精神論で批判しても事件は解決しない。

1986年「このままじゃ生き地獄になっちゃうよ」と遺書を書いて自死した事件は記憶に残るものであった。教師を含めて葬式ごっこをしていたことは許しがたいものであった。しかし、最近になって知ったことであるが、そこでの教師が、

「気づけなかった。私たちはどう対応したらよいかわからない」

と、今回と同様の声を上げていたという。

★ いくつかの提案

ではこうした事件にならないために、どうしたらいいのだろうか。

1 活動を通して関係性をつくる

民研会員の地多実践をあげる。彼の学級には失敗をしたことをきっかけにいじめられキャラになったNがいる。話し合いの結果、「いじめられキャラで遊ぶことはやめよう」ということになった。しかし、話し合いだけではほかの子がいじめられていたり、教師のみでないところで潜伏していたり簡単に意識を変えることは困難であった。地雷などのボランティア活動、Nが塾でいじめられていてそれを守るという方向に集団が動いていったときにいじめがなくなっていった。グループ内のキャラいじめは外側に目的をもった活動と一緒に取り組んでいくことで共同体的な関係へと変わっていった。活動を通して「～する」「～した」といった行為で構築されたコミ

ュニケーションになり、確固としたものになった。

該当校では今現在も「死ぬ」といった言葉が飛び交っている。そういう意味でも「文言」の指導だけでは解決できないであろう。

2 集団を優先にする全体主義がいじめを

岐阜聖徳学園大学の宮川啓一氏は以下のように述べている。

「学校は集団優先する全体主義である。学校がいじめ発生の土壌をつくっている。集団優勢の全体主義、「〇〇さん」ではなく、「その3年生」というしかり方。校訓は協力・団結・挑戦といったもので個々人の願いである笑顔・元気・幸せといったものではない。

生徒指導が、「あなたのためを思ってスカート丈を決めている・・・」といった、自立を引き起こすものではなく、母性原理的である。子どもを守ることはできても育てることにはならない。ひとりひとりの事情とか思いを大事にしない教育がいじめを引き起こしていると考えられる。

3 教室に自治を

今年行われた民研主催の報告書の検討学習会で折出健二氏は「生徒指導の在り方が問われている。ゼロトレランスで、徹底排除の考えになっている。いじめはいけないと教師による指導の対象として生徒を客体化している。それでは問題は解決されない。子どもたちが自分たちの集団をどうしていくのかという自治をつくっていくことが重要である」と指摘している。

生徒たちが今回の事件について、どうしてこうなってしまったのか、防ぐにはどうしたらよいか、自分たちの考えを出していくことでしか「死ぬ」といった言葉をなくす手立てはないのではないかと。

大河内くんのいた学校で、生徒会主催でいじめ防止の取り組みをしている。教室に自治をつくっていくことを今一度考えたい。

4 生きていくことを喜べる学びを

ひとつの解釈をめぐって討論が巻き起こり、自信をもっていた考えを相手の意見で覆す心地よさを味わったり、思いもかけぬ展開に驚いたり、知的好奇心がむくむくと湧き上がってくるような、学びを保障していくことがいじめをなくすことに

つながっていくと考える。

★ 最後に

2013年6月「いじめ防止対策推進法」が施行されてから1年間に少なくとも6人の中高生がいじめの疑いで自死し(2014/6/11 毎日新聞)、止まらない。

子どもたちとともに私たちが知恵を合わせてストップをさせたい。

紹介 あいち県民教育研究所 叢書19号
【調査報告書】

親と子の10の物語が問いかけたこと

発行 2014年8月

現代の親の実像をとらえる

調査プロジェクト著

<目次>

- ◆物語1 児童期に子どもらしさが発揮できるように
- ◆物語2 ひとり親世帯からみた、子育ての課題 社会の課題
- ◆物語3 今、自分にできる子育てネットワークづくり
- ◆物語4 いじめと戦う親 いじめに遭ったら公に
- ◆物語5 学校の指導に異議を感じる母親
- ◆物語6 子育てを支える環境と親のあり方
- ◆物語7 発達を保障された教育と教育費補助を
- ◆物語8 困難な中で希望を
- ◆物語9 子どもの発達を支える親のあり方
- ◆物語10 健やかな子どもの土台づくり

頒価 1冊500円

あいち民研・教育への権利部会 公開学習会のお知らせ

名古屋中学生転落死 検証委員会報告書を 検証する

—教職員の勤務実態・部活動指導

・多忙化問題を中心に—

昨年7月10日、名古屋市立中学校の2年生の男子生徒が飛び降り自殺しました。学校生活でのいじめが原因とされています。名古屋市は「検証委員会」を発足させ、報告書を公表しました。あいち民研は検証に当たっては「当該学校の学校教職員の勤務実態や生徒指導の実態」を明らかにするよう要望しましたが、この点に関しては不十分なものとなりました。

学習会では、当該学校の勤務実態を明らかにするとともに、部活動指導の問題について検証します。二度とこのような悲劇を生み出さないために何をしなければならないか考えていきたいと思えます。

日時：7月30日（水）午後6時から8時まで

場所：名古屋市教育館（名古屋・栄）第8研修室

報告①内田 保（愛教労）部活動問題を中心に

②中村茂喜（名教労）M中学校の勤務実態
・超過勤務問題を中心に

【参加費:無料】

*報告書の事前送付を希望される方は、下記の大橋のアドレスまで個人メールで住所をお知らせください。

問い合わせ先
大橋基博

motohiro@polka.plala.or.jp